

「できる状況づくり」を取り入れた生活単元学習に関する研究

- 調理活動を通して -

佐賀県立伊万里養護学校 教諭 樋口 千代美

要 旨

本研究は、生活単元学習において、児童が自ら主体的に取り組むことができるように、「できる状況づくり」を取り入れた支援の在り方を探ることを目指したものである。手立てとして、児童の興味や関心に合った単元のテーマや活動内容を設定し、見通しがもちやすいように同じ流れで同じことを繰り返すようにした。その結果、児童は興味や関心を持続させ、達成感や満足感を得て主体的に活動するようになった。また、一人一人の児童の実態や活動内容に合わせた補助具や場の設定などの支援も大切であることが分かった。

<キーワード> 生活単元学習 「できる状況づくり」 主体的 興味や関心

1 主題設定の理由

知的障害養護学校においては、児童生徒が自立し社会参加するために、必要な知識や技能、態度を身に付けることを大変重要視している。本校では、単元ごとにテーマを設定し、一定期間そのテーマに沿った活動を毎日繰り返しながら、見通しをもって取り組むことができる生活単元学習を中心として、より実際的な生活への取組を行っている。

児童が自ら主体的に取り組み、生き生きと活動することができれば、毎日の生活が充実し、満足したものになると思われる。そのためには、教師が児童の興味や関心、実態を見極め、主体的に活動することができるような「できる状況づくり」を整えることが大切である。「できる状況づくり」は、テーマ設定の段階から実際の授業での補助具作り、場の設定や工程の工夫、教師の支援等、多岐にわたる。

本校の小学部2年生には、8人の児童が在籍しており、ダウン症・自閉症・知的障害などの障害をもっている。単元の初め、見通しがもてずに戸惑っている児童がいる反面、同じ活動の繰り返しで単元の後半には飽きてしまう児童もあり、それぞれの児童が主体的に取り組めるような支援の必要性を感じていた。

そこで、本研究では、生活単元学習の中でも児童の興味や関心の高い「調理活動」を取り上げ、障害の状態や特性を考えながら、一人一人の児童が主体的に取り組むための「できる状況づくり」を取り入れた支援の在り方について研究したいと考え、本主題を設定した。

2 研究の目標

生活単元学習の調理活動において、一人一人が主体的に取り組むことができるための「できる状況づくり」を取り入れた支援の在り方について研究する。

3 研究の仮説

生活単元学習において、児童の興味や関心に合った「調理活動」を設定し、「できる状況づくり」の手立てを児童の実態や活動の内容に合わせて行えば、一人一人が主体的に取り組むことができるであろう。

4 研究の内容と方法

調理活動での技能や食に関する児童の実態把握を観察や試食により行う。

生活単元学習の在り方や「できる状況づくり」の考え方について文献による調査を行う。調理学習について実践例を基に教材研究を行い、児童の実態に合った補助具を作製する。仮説に基づいた授業（第2学年）を実践し、分析及び考察を行う。

5 研究の実際

(1) 研究の全体構想

本研究では、領域・教科を合わせた学習の中の生活単元学習において、児童の興味や関心に沿ったテーマを設定し、一人一人の児童の実態に合った「できる状況づくり」をすれば、満足感や達成感を得て主体的に取り組み、生き生きと活動する子どもになるだろうと考え、研究の全体構想を図1のように考えた。

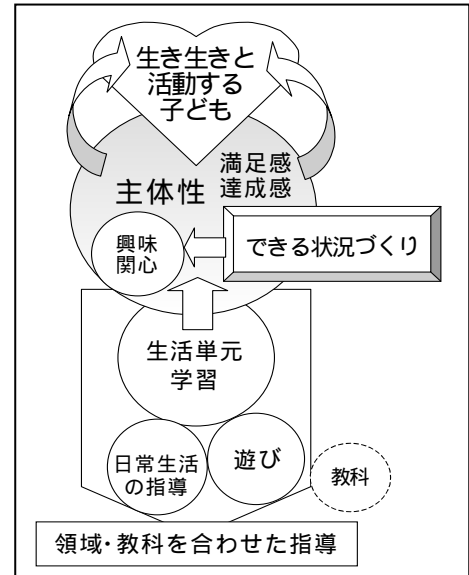


図1 研究の全体構想

(2) 「できる状況づくり」の考え方

本研究では、単元のテーマ設定から授業での補助具作りに至るまで、一人一人の児童の実態に合わせたすべての手立てを「できる状況づくり」ととらえた。また、生活単元学習は一定期間そのテーマに沿った活動を毎日繰り返すことから、この「できる状況づくり」は児童の変容に合わせて変わっていくものと考えている。

(3) 「できる状況づくり」の手立て

学習指導要領の解説から児童にとって望ましい生活単元学習にするための指導計画作成の考慮点(表1)を基に、本研究で研究したい下線部の3つの要素を踏まえ「できる状況づくり」の手立てを考えた。

児童の興味や関心に合った単元のテーマや活動内容の設定
見通しをもって取り組むための活動の流れや場の設定・工程の工夫

一人一人が力を発揮して取り組むための道具や補助具作り

表1 指導計画作成上の考慮点

ア	興味や関心にあったもの
イ	生活に生かされるもの
ウ	見通しをもって取り組むもの
エ	力を発揮して取り組むもの
オ	生活としてまとまりのあるもの
カ	多種多様な経験ができるもの (引用者による要約)

(4) 検証の視点

検証の視点	検証内容	検証方法
補助具、場の設定及び工程の工夫	児童の作業の様子を見ながら、一人一人の力を発揮できるような手立てであったか。	観察 ビデオ
児童の興味や関心	児童が調理学習に興味や関心を示し、同じ活動の繰り返しでも、興味をもって活動していたか。	観察 ビデオ
児童の主体的な活動	見通しをもって自分から活動し、達成感や満足感が得られていたか。	観察 ビデオ

(5) 授業の実際

12月になると町はクリスマス一色になる。そこで、児童が興味や関心をもちやすい調理活動を中心に、季節感を味わうことのできる「クリスマスパーティをしよう」という単元を設定した。午前中の活動では、本学年の児童8人がみんな食べることができるクッキーやプリンを作り、午後の活動では招待状やツリーの飾り作りをして、クリスマスパーティを楽しみに活動して欲しい。

本授業では、見通しをもつと自分から活動する児童(A)、同じ活動の繰り返しで飽きてしまうが作

業能力は高い児童(B), 興味に移りやすいが人とのかわり好きが好きな児童(C)の3人について取り上げ, それぞれの児童が主体的に取り組むことができるように支援していきたいと考えた。

ア A児の実態と「できる状況づくり」の手立て

(ア) 視点 (補助具, 場の設定及び工程の工夫)

表2のA児の日常生活や前単元の調理活動の様子を基に, 表3の活動内容や活動量を考えた。表4はあらかじめ決めておいた教師の願いや「できる状況づくり」を基に, 単元の開始後, 1週間のうちに修正を加えたものである。

表2 A児の実態

日常生活での様子
1日の活動の流れが変わると, 対応が難しい。
次の活動へは, 具体物を持って移動している。
前単元の調理活動の様子
具体物を見ると, 自分からスムーズに次の作業に移ることが増えた。また, 行う活動や作る手順を一定にすると, より見通しをもって活動に取り組めた。
今する活動に必要なものは, 目に見えないところに置くようにすると, 作業に集中するようになった。

表3 プリン作りの流れ


プリン作り
・プリンミックス, お玉, 計量カップを用意する。
・ポットのお湯を入れる。
・ボウルにプリンミックスを入れる。
・お湯(70 以上)200mlでよく溶かす。
・さらに水100mlを加え, よく混ぜ合わせる。
・お玉でプリンカップに入れる。
・冷凍庫まで運ぶ。
・冷凍庫で固める(約20分)。
・使った道具を片付ける。
・冷凍庫から, プリンを運ぶ。
・出来上がったプリンを配る。
・使った道具を片付ける。

表4 様子, 教師の願い及び「できる状況づくり」

A児の様子
出来上がりのプリンの写真を楽しそうに見ている。教師と一緒にプリン作りをしている。
教師の願い
できるだけ1人でプリンを作してほしい。
主な「できる状況づくり」
自分で準備できるように, 作業室のロッカーにエプロン, 計量カップ(お湯用), プリンの箱を置いておく。
途中で使う道具は, 工程ごとにトレイに入れて棚に準備しておき, 次に使うものだけを出すようにする。
自分一人で運べるように, 適当な大きさのかごを用意する。

表4の主な「できる状況づくり」の手立てを具体的に示したのが, 図2, 3である。A児はこれらの手立てにより, 自分の力を十分発揮するようになった。図中の は児童の様子で, は「できる状況づくり」の手立てに対する評価である。

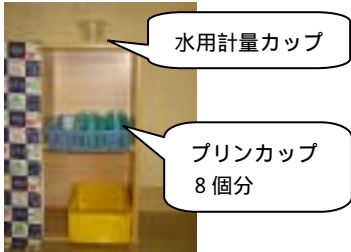
「できる状況づくり」



作業室固定のロッカー

A児は単元開始から4日目には自分からエプロンを持ってきた。お玉, プリンの箱及び計量カップは自分から作業台まで運んだ。
A児がロッカーの中の具体物を見て次にすることが分かるようになり効果的であった。

「できる状況づくり」



水用計量カップ
プリンカップ 8個分

2段ボックスを利用した専用棚

単元2週目からは, 指差すと次の作業の道具を取るようになった。次の作業に移るたびに場所を動かなければならないが, 見える範囲に次の道具があると集中することが難しいA児には効果的であった。

「できる状況づくり」



運搬用の黄色い箱

単元2週目に入ると自分から箱にプリンを入れるようになった。箱を渡すと自分から冷凍庫まで運んだり, 冷凍庫から持ってきたりした。
8このプリンカップが丁度入る大きさに運ぶのに都合が良かった。

図2 A児の「できる状況づくり」 工程の工夫

図3 「できる状況づくり」 補助具

(イ) 視点 (児童の興味や関心)と視点 (児童の主体的な活動)

A児は, 3週間毎日飽きることなく喜んでプリン作りをした。それは, 食べることと見通しをもたせるための工程の工夫があったためと考えられる。

イ B児の実態と「できる状況づくり」の手立て

(7) 視点 (補助具, 場の設定及び工程の工夫)

B児について, A児と同様に実態, 作業の流れ及び教師の願い等について表5~7に示す。

表5 B児の実態

日常生活での様子
刺激(光や音)に対して影響を受けやすい。
1日の流れは写真のスケジュールカードで確認。
前単元の調理活動の様子
一度やり方を覚えるとのみ込みが早く, 1人で作業できた。目の前でやり方を見せた方が良かった。
自分のペースで作業を進められるように, 1人分のクッキー作りをした方が良い。
出来上がりの生地の状態を知らせること, 型抜きした残りの生地の終わらせ方など, あいまいなことをどう伝えるかが難しかった。

表6 クッキー作りの流れ (B児の手順表に基づく)

手順表(2/4時以降)
バターを泡立て器で混ぜる。
砂糖を2回に分けて加え, 混ぜる。
卵・バニラエッセンスを加えて混ぜる。
薄力粉を量る。
薄力粉をふるう。
ベーキングパウダーを入れ, ゴムベラで混ぜる。
クッキーの生地をお玉でピニール袋に入れ, よくもむ(たたく)。
麺棒でのばし, 打ち粉をする。
型抜きをする。
オープンに入れる。
使った調理用具を洗う。
袋詰めをする。
~ はトレイの番号と対応

表7 様子, 教師の願い及び「できる状況づくり」

B児の様子
教師と一緒にクッキーを作っている。途中で手を休めてしまうこともあるが, 型抜きは好きで集中して作っている。
教師の願い
手順表や調理用具を見ながら, 1人でクッキーを作ってほしい。
主な「できる状況づくり」
手順を12段階に分け, それぞれの調理用具をトレイの中に入れておくようにした。
手順を確認できるように, 目の前に手順表を貼っておき, それに合わせてトレイにも番号を付けておいた。
オープンシートを載せた天板に25個の紙枠を作り, 型抜きの終わりが分かるようにした。

表7の主な「できる状況づくり」の手立てを具体的に示したのが図4である。B児はこれらの手立てにより, 自分の力を十分発揮するようになった。また, 多くの作業を順序通りにしていく必要があるB児にとって, 専用の棚を利用した工程は分かりやすい工夫だったと言える。

さらに, 必要なときに自分から手順表を見て確認したり, 教師が指差をすると, 見て作業を続けるきっかけにしたりしていたことから, 写真カードによる視覚的な情報は効果的であることが分かった。

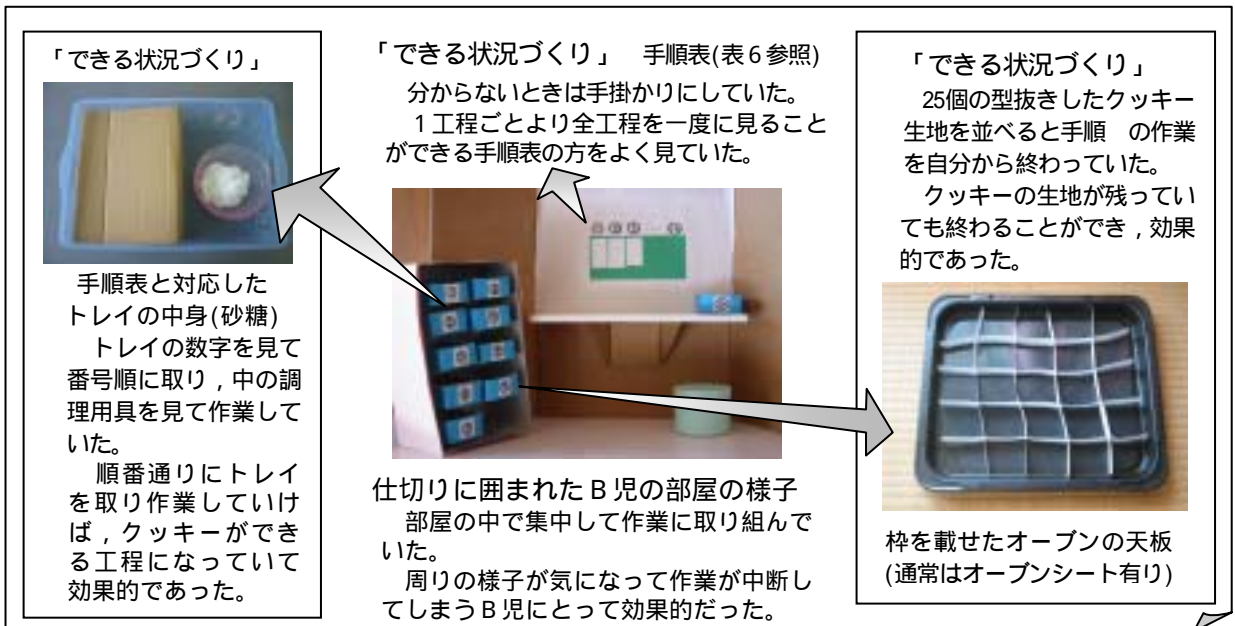


図4 B児の「できる状況づくり」 補助具

(1) 視点 (児童の興味や関心)

B児がとても好きな型抜きの作業を取り入れた。この作業では, 型抜きを始めてから終わるまで離席がなく, 単元の最初から集中して取り組んでいる。4日目に12分程度だった作業時間が, 8日目に

は、8分半程度になった。このことから、やり方を理解し、手際よくこなすことができるようになったと言える。

(ウ) 視点 (児童の主体的な活動)

準備からオープンに入れるまでの支援回数を図5に示した。凡例のaは指差や具体物による支援、bは一緒に作業したり、実際にして見せたりする支援を表している。単元の前半では確実に支援回数が減っているが、単元の後半には、やり方が身に付いたために支援回数に変化が見られなくなった。B児にとって必要最小限の支援になったと考えられる。

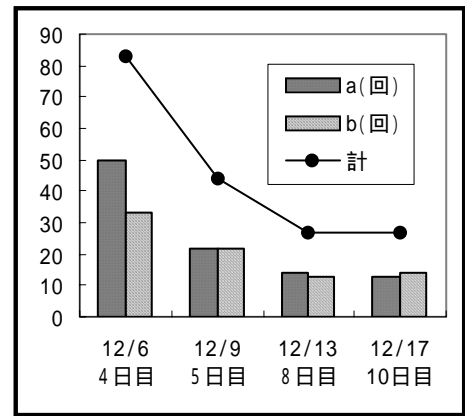


図5 B児への支援回数の変容

ウ C児の実態と「できる状況づくり」の手立て

(ア) 視点 (補助具、場の設定及び工程の工夫)

C児について、A児と同様に実態、作業の流れ及び教師の願い等について表8～10に示す。

表8 C児の実態

日常生活の様子
長時間座って作業することはあまり好きではないが、少しずつ取り組むようになってきた。
自分の好きなことは繰り返しする。
前単元の調理活動の様子
単元が進むにつれて、次の作業への見通しがもてるようになると、自分からしようとするが増えた。
幼児雑誌のたまごのキャラクターを見ながら、喜んで卵を割っていた。
洗濯の手順を覚え、テーブルクロスを自分から洗濯していた。

表9 C児の流れ
(注文・配達を含む)

- クッキー作り**
- ・卵を割る。
 - ・クッキーの注文を取りに行く。
- 飲物作り**
- ・ペットボトルに粉を入れ、少量のお湯を入れてよく混ぜる。
- クッキー作り**
- ・強力粉を振って、ローラー麺棒で5～6mm厚さに延ばす。
 - ・好みの型で抜く。
 - ・オープンシートを敷いた天板に並べる。
 - ・注文の材料を載せる。(スライスアーモンド・ドライフルーツ・チョコチップ)
 - ・使った道具を片付ける。
 - ・出来上がったクッキーを袋詰めする。
 - ・注文されたクッキーを届ける。

表10 様子、教師の願い及び「できる状況づくり」

C児の様子
「注文を取りに行くよ」と声を掛けると、自分から注文用のホワイトボードを持って、嬉しそうに作業室を走り出している。
教師の願い
クッキーの注文を取ったり、配達したりする活動をより楽しんでほしい。
主な「できる状況づくり」
より楽しんで行くように注文を取りに行く人を自分で決めて、ホワイトボードに貼るようになる。注文を受けたクッキーを楽しんで運ぶようにかごを用意する。クッキーに値段を付けて、配達したときにお金(おもちゃのコイン)をもらうようにする。

「できる状況づくり」

注文用ホワイトボード

注文を取りに行く人を喜んで選び、ビニールテープの枠の中に貼っていた。
ホワイトボードに貼ることで自分が選んだ人を覚えておく手掛かりにしていた。

「できる状況づくり」

配達用かご

「おつかい」と言って配達を楽しんでいた。顔写真を確かめて渡していた。
注文用ホワイトボードからの顔写真を貼り、正確に注文どおりのクッキーを渡すのに役立っていた。

「できる状況づくり」

貯金箱

配達に行くときは忘れずに持って行った。コインを入れる口が少し小さかったが、途中で諦めずに入れていた。
最初はクッキーの代わりにお金をもらるのが嬉しいようだったが、すぐに興味がなくなった。この貯金箱が気に入っていたため、配達には忘れずに持って行った。

図6 C児の「できる状況づくり」 補助具

表10の主な「できる状況づくり」の手立てを具体的に示したのが前頁図6である。C児はこれらの手立てと教師の支援により、自分の力を十分発揮するようになった。

(イ) 視点 (児童の興味や関心)

C児が意欲的にクッキーを作って欲しいと思い、注文取りと配達を担当にした。作業として様々な場所に行けることで、注文取りに向かう足取りは軽く、自分から人にかかわることが好きなC児にとっては楽しい活動であった。同じ活動が続くと飽きやすいが、注文取りと配達に関しては最後まで生き生きと取り組んだ。注文取りがクッキー作りの意欲を持続させていたと思われる。

(ウ) 視点 (児童の主体的な活動)

1週間で手順を覚え、2週目の終わりごろには、「次は何をするの?」という声掛けで自分から作業に取り掛かることが増えてきた。他のことに興味が移りそうなときには、「先生がクッキーを待っているよ」という肯定的な声掛けをすると、やるべき活動にスムーズに戻ることができた。

6 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

研究を進めて行くうちに、生活単元学習にはより綿密な計画が必要であることが分かった。そこで、指導計画作成上の考慮点(2頁表1参照)に配慮しながら、図7に示すように、単元の流れで、のテーマ設定を基に～までの視点で考えていく方が良いと考え、主体性を導き出すための構想図を考えた。

本研究で、「できる状況づくり」の手立てを行った結果、次のような児童の主体的な姿が見られた。

初めての経験でなかなか見通しがもてずに戸惑っている児童には、見通しをもちやすくするための手順表や作業システムを取り入れれば、次の作業に見通しをもって取り組めるようになることが分かった。

毎日同じ活動の繰り返しで飽きたり、活動の途中で作業が中断したりする児童には、好きな作業を取り入れ、集中できるような環境作りをすれば、作業が早くなり、途中で他のことに気持ちが移ってしまうことが少なくなることが分かった。

興味が移りやすく、作業に飽きてしまう児童には、場を変えることで気分を変えたり、活動内容や日程計画を工夫したりすれば、興味や関心をもって生き生きと活動するようになることが分かった。さらに、人とのかわりが好きな児童には、自分たちだけの活動にとどまらず、周りの人たちを引き込むような活動にすると、達成感や満足感をより味わわせることにつながっていった。

(2) 今後の課題

個別の指導計画との関連から考えられる「できる状況づくり」について研究を深めたい。

製作活動においても、テーマ設定や単元の最初に興味や関心がもてるようなことを取り入れて、児童が自ら主体的に活動することができるような生活単元学習の在り方を探りたい。

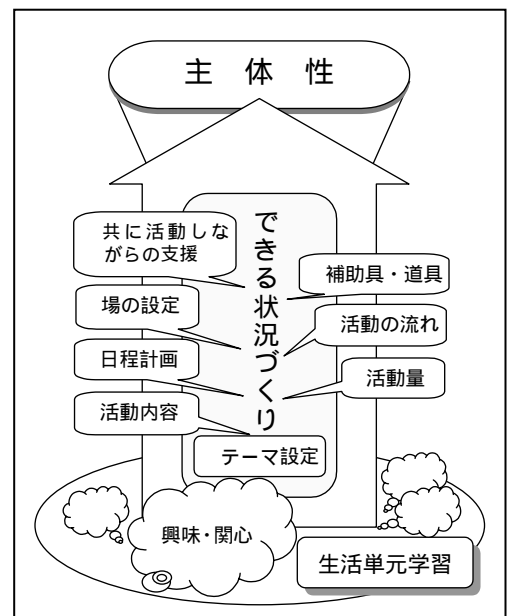


図7 生活単元学習で主体性を引き出すための構想図

《参考文献》

- ・ 小出 進監修・千葉大学付属養護学校編著 『生活中心教育の原理』 2002年 学習研究社
- ・ 小出 進著 『生活中心教育の方法』 1993年 学習研究社